

葉集を読む

松岡 隆子

透き通る露草の目に見上げられ

宮当 信行

月の雫を宿したような露草の澄んだ青さは見つめるほどに吸い込まれそうになる。作者は露草の青さを見ようとした瞬間、露草の青い目に見上げられたという。透き通った露草の視線にたじろぎながら露草に目を返す。露草との相聞歌と言おうか。露草を独自の視点で詠んでいて印象深い。他に〈台風の間、露草の青い目に見上げられたという。透き通った露草の視線にたじろぎながら露草に目を返す。露草との相聞歌と言おうか。露草を独自の視点で詠んでいて印象深い。他に〈台風の近づく夜の鏡かな〉にも独特の感性が感じられる。夜の鏡の無機質な冷たさはどこか台風の接近を思わせるものがある。

師の家は萩の生け垣黒瓦

西島 美晴

想像するに、茶道や華道、または書道の師匠の家ではなからうか。萩の生垣とは何とも雅である。そのうえ黒瓦の家となると落ち着いた風格のある日本家屋が想像される。枝垂れ咲く萩を見上げながら門を潜る。手入れの行き届いた和風庭

園には枯山水があり、灯籠が据えられ……と想像がふくらむ。作者の敬愛する師の家は和の文化の香りのする家ようだ。

物言へぬ病児を抱けり秋の暮

安達みわ子

同時作に〈夕月夜病む児をあやす子守歌〉がある。どこがどう具合が悪いのか訴えることのできない病児はただ泣き続けるばかり。抱き上げると熱のある小さな体が熱い。看護師である作者には病状のことは分かっている。今晚がピークで明日からはだんだん快方に向かうはずだ。夕月夜のもと子守歌の声にようやく安らかな寝息を立て始めたようだ。看護師としての作者の体温の温もりが感じられる作品である。

兜煮の目玉の白さ身に入めり

小泉 恵子

兜煮とは広辞苑によると「鯛などの頭を兜に見たてて形のまま煮たもの」とある。醤油や味りんなどで甘辛く煮た鯛の頭は見た目以上に身が詰まっている。カマのあたりは脂が乗っていて美味しい。目玉の周りほとろりとしていて栄養価も高いといわれ、食通の人は好んで食するところである。ただあのギョロリとした大きな目玉を見ると、咎められているようで身のすくむ思いがする。兜煮の目玉の白さは正に身に入む白さである。

労はることに疲れて敬老日

早出 誠治

同時作の〈つくづくくと仲間も老いぬ敬老日〉と併せて読む

と作者の心境が理解できる。一人暮しの作者を案じて「大丈夫？ 手伝いに行こうか？」などと子どもたちが声をかけてくれる。敬老の日ともなると特にあれこれと世話をやいてくれる。有り難いことだが特別扱いされるのも疲れるものだ。ところが、敬老会に集まった仲間を見ると皆いつの間にか老齢になってきている。まだまだと思っていたが自分もそれなりに老いてきたようだ。などという心境であろうか。敬老の日とは老いを意識させられる日でもあるようだ。

常のごと掃除洗濯敬老日

山下なつ子

敬老の日と言えどもいつものように掃除や洗濯をする。子どもや孫たちが集まって祝ってくれるにしても、掃除や洗濯などの日常のことは主婦である自分がやるほかはない。改めてその現実が付いて苦笑しているのである。と言うより誰の世話にもならず自分で出来るのを良しとして、玄関先を掃いたりして子どもたちが来るのを待っているのかもしれない。同性として共感を覚える。

夏まつり良い子にされてはにかめり

田中 律子

良い子にされてはにかむのは三、四歳くらいまでだろうか。三歳くらいの女の子が浴衣など着せられている姿は愛らしいものだ。着なれない浴衣に自ずと仕草も淑やかになり行儀もよくなる。普段はやんちゃな女の子が、良い子にされてはにかんでいる姿は微笑ましい。

出来ぬこと又一つ殖ゆ桐一葉

武田美紗子

若い時は何でもてきばきとやれたことが年を取るにつれ思うように出来なくなってくる。〈出来ぬこと又一つ殖ゆ〉の〈又〉が切ない。誰もが実感する加齢現象の一つと甘受するものの一抔の淋しさがあろう。〈桐一葉〉に作者の思いが託されている。

秋雨や日にいくたびも眠る母

朱 桂子

十月号に〈百日紅白寿の母に咲きつげり〉と母を詠んだ句がある。人生百年の時代と高齢化が推奨されているが、実際に百歳まで生きるのは大変なことだ。白寿ともなれば寝たり起きたりの日々が普通であらう。昼間も目を覚ましたかと思うと暫くするとまた眠ってしまう母を優しく見守っている。母とは傍に居てくれるだけで有り難い存在なのである。

その他の印象句

生き物の声無く潜む炎天下	田辺 文枝
百日紅落花の嵩が風に舞ふ	阿久津早智子
朝夕の空を遠へて九月かな	鈴木 富代
処理水放出満月は中天に	山崎 和音
朝顔の紺や父母在りし日々	宮内 一昭